

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

Q. 中学生当時、「全体学習（みんなで語り合う人権学習）」をどう感じていたか？

「そのときに感じたことをそのまま発言したり、その言葉を聞いて賛同したり、私はこんな体験をしたというのを、教員や生徒の関係を超えて、感じた矛盾や悲しみや怒り、いろんなものをぶつけ合ったと思います。」

身近な家族から差別的な発言を聞いた。

兄弟姉妹が結婚するときに周囲からの反対があった。

自分の家族が差別にあっている…などなど。

自分だけ悩んでいるのかと思うとそうではなく、同じようなことで悩んでいたり、全体学習をとおして実はそれが相手を傷つけていたことや、差別をしていたということに気づけた。気づいて、同学年の意見を聞いて、自分で考えて発表することで、自分のこととしてどうしたらよいかということぶつけることのできる場所だったように思います。」



教師と生徒、大人と子どもという立場を超えること。
お説教でなく、上から目線でなく、権威的でなく。
ひたすらひとりの人間として、互いの思いを、悩みを、
苦しみを、悲しみを、怒りを、吐き出す。
そこに生まれたのは、「人と人」としての共感の輪。

Q. 十数年経った今、どう思っているか？

「中学のようにある意味守られた世界ではなく、就職し社会にでるといろいろな問題にぶつかります。全体学習の発表で聞いていた「差別的な発言」や、「結婚の反対」など、なんとなく聞いていたことが、現実にあります。」

今思うと、全体学習をしていたから負けずにやってくられているのかなあとと思います。特に思うのは、自分に子どもができたので、自分の体験や考えを伝えたいという気持ちと、その子たちにどう伝えていくのがいいのかなあと。

最後に、一人の先生のきっかけで始まったかもしれませんが、当時の校長先生から生徒に関わるすべての先生にいたるまで、いろいろな試行錯誤のなかで全体学習が作られてきたのではないのでしょうか。先生方も生徒から何かを感じ、発信したからこそ、素晴らしいものになったように思います。その学年が卒業したり、先生が他校に移っても、新入生が入り、新しい先生が入っても、全体学習が続いていけば、それはその学校の「ねんりん」となって輪が続いていくような気がします。」

「自分だけじゃなかった」

そう思えるのは、同じ思いをもつ友と語り合えたから。

人を知って、本当の自分を知る。

彼が十数年ぶりに記した文。そこに記された「ねんりん」。

それは、当時その学年が毎日発行していた学年通信のタイトルでした。

あたたかな陽射しを浴び、木は年輪を積み重ね、枝をはり、そしてやわらかな葉を広げる。

十数年の時を経てなお心に残り続ける人権学習を、すべての子どもたちに。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」



うずしおブランチ代表